



愛郷無限

土屋館  
どやだて  
通信

発行者：大曲・花火通り商店街  
文責：辻

お問い合わせ：080-1265-7035  
tuck-t@akita-tsujiya.jp

2014年06月23日号 NO.480

写真提供：大仙市

## Subject：里山資本主義講演会 再生可能エネルギー

6月21日、ドイツと日本の再生エネルギー先進地域を引っ張るリーダーお二人を大曲に招待して講演会を開催しました。定員100名に対して参加者は何と180名! しかも地元大仙市は50名に対して残りの130名は秋田市や県北など県内各地から、遠くは東京・仙台・神奈川・新潟からも参加。再生可能エネルギーに対する注目度の高さと、今回の講師二人の凄さ・認知度の高さが如実に表れています。

私たちは電気や熱源などエネルギーについて本当に【無知】で【無関心】です。

2011年の311以降、原子力発電の危険さに注目が集まりましたが、それものど元過ぎてしまった感があります。エネルギーは常に当たり前にそこにあり、スイッチを付ければ利用出来るものだ考え、意識すらしていません。またエネルギーを得るためにどれだけの資本が域外に流出しているかを考えたことがありません。

講師お二方は日本とドイツに於いてそれぞれの地域に合った手法で【域外に流出する資本を最小限に抑え、地元で分け合う・共助し合うシステム】を作り上げてきました。地域によって事情や条件、環境が異なるので、彼らの手法をそっくりそのまま真似すれば上手くいくものではありません。しかし、彼らに共通していることは、【各々の地域にある資源を最大限に有効活用して外部に流出する資本を減らし、内部にとどめようとする趣旨】であり、それは全国・全世界の地方が目指すべきだと思えます。岡山県真庭市の中島社長はそれを木材資源副産物の有効利用に見だし、ドイツのミュラーさん達は、太陽光・風力・木質バイオマスの組み合わせに見だしました。

自分たちの地域にあった素材と手法でなしとげることであり、先ずは自らが気付いて行動せねばならないのだとミュラーさんは我々に強く問いかけてくれました。余りにも無策な私たちはもっともっと先達に学ばねばなりませんね。決して他人事にはならないということがよく分かりました。

特にドイツのミュラーさんの再生エネルギー会社では、数百軒の集落単位で、その地区が元々持っている資源を上手に使用して、電気と熱水の自給方法を選択し、設備を設置し、運営しているそうです。その資金源は地域の住民達から少しずつ出資してもらった資金です。集落の単位でエネルギー自給が実現されています。このことは日本ではあまり紹介されていない気がします。

経済評論家の内橋克人さんが1980年代から提唱し続けた【FEC自給圏】が私たちのバイブルになります。FECとは、Foods（食糧）、Energy（エネルギー）、Care（人的つながり）の頭文字です。特にエネルギーは自分たち自身で気付いて考え出さねばならない喫近の課題であることがヒシヒシと伝わってきました。

講演の様子を収録したビデオDVDと、音声データCDを用意しました。当日参加できず是非聞きたいという方は辻までご連絡ください。私用としてお貸しします。